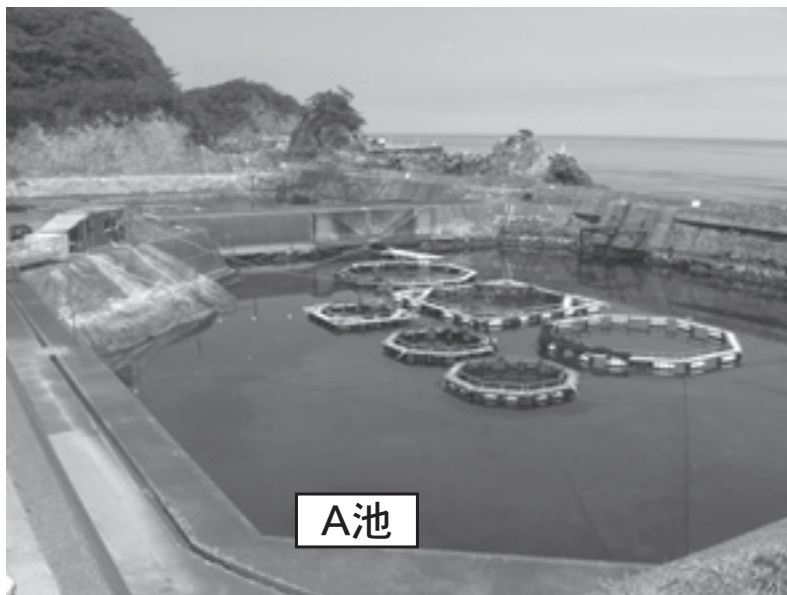


公共施設再見

第 2 回 新島村養殖場施設（上）

「失敗学」という学問分野がある。これはある目的のために実施してきた事業が目的どおりの結果が得られなかったとき、なぜか？を研究する学問と言ったらよいか。東日本大震災のとき、福島第一原子力発電所の処置の件で注目された。



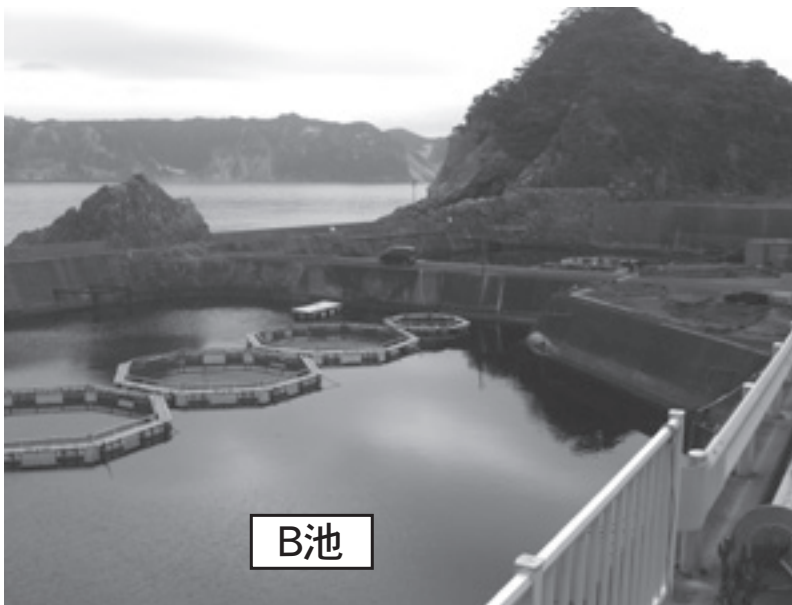
なぜ同じ失敗が繰り返されるか？人は自己の過ちを認めたくないものであり、組織となると防衛本能が働いてしまう。特に公共団体の場合、民間とは異なり、本体が消えてなくなることはない。このためむしろ失敗の原因は明らかにされず、あいまいなまま見過ごされてしまうことが多い。

しかし失敗は成功の元と言われるように失敗の原因を究明することは大切であり、新たな発展の原動力となる。

今日、日本は繁栄の絶頂期から下り坂を徐々に進んでいるが、その中には失敗と呼んでもいい事業が少なからずあるように思う。特に地方公共団体が実施してきた公共事業には様々な思惑がからんで、失敗と言ってもその原因は複雑で一筋縄にはいかない。今回、取り上げる式根島の亀の甲にある養殖場の建設・運営であるが、これまで色々と批判にさらされてきた。なぜ、村が収益事業をやるのか、赤字続きで税金の無駄使いではないか、地域社会にどう貢献しているのか、などなど。そこで改めて関係者や現場の声を聞き、住民のみなさんに現状を知っていただき今後のあり方を考える一助となるよう論を進めていきたい。

そもそもの発端は昭和50年代の中頃、シマアジの価格が高値で取引（キロ当たり8千円～1万円）されていて、当時の新島では捕獲した稚魚を島

外の養殖業者に出荷（キロ当たり1千円～2千円）していた。それなら自前で育て成魚として売り出せば新たな地場産業となるのではないか、獲る漁業から育てる漁業への潮流にも適っている、ということで俄然、脚光を浴び、養殖場建設に邁進することになった。



B池

この事業には当時の式根島漁業協同組合（以下「当漁協」）がぜひ自分たちでやりたいと手をあげ、その結果、式根島に施設を造り、運営してもらう手はずとなった。

当漁協が提示してきた場所が今の養殖場となっている亀の甲である。当時そこは海側に岩場があり、手前は砂浜の平坦地だった。規模としては小さく採算性がとれるか、懸念されたが、とにかく式根島にはそこしか適地がないということで決定した。まずA池の工事（面積4千 m^2 水深5～7m

工事費4億67百万円）が昭和57年度から始まり、途中、請負業者が変わり難工事となり、完成まで6年を要した。

この間、養殖技術が進歩し、稚魚の捕獲に代わって採卵・受精・孵化までが可能となり、稚魚の量が爆発的に増加した。また他の要因も重なってシマアジの養殖そのものの魅力もうすれた。つれてシマアジの市場価格はキロ当たり半値以下の4千円台まで下落。こういった事情を反映してか、当漁協は施設の完成を待たずに養殖事業の第一線から手を引いてしまうことになった。

このため完成後、昭和63年度からの事業は、村営となり臨時職員、数名を雇い、シマアジの稚魚を育てることからスタート。その後、平成4年度からB池の工事（面積33百 m^2 工事費7億9百万円）に着工し、6年かけて完成し、現在に至っている（なぜB池の工事に着手したのか、これも大いに議論の余地がある）。魚種はシマアジに加え、真鯛、イシガキ、真アジ、平目の養殖を手掛けてきたが、赤字は一向に解消されず仕舞いのままである。

次号は現在の養殖事業の取り組みを紹介したい。